

誰の時代にそれが起こったか？ ローマ皇帝コンスタンティヌス帝（270頃-337/在位 306-337）の時代です。彼はユダヤ人にとって良い命令と悪い命令の2つ出したんですね。

良い命令は、ユダヤ人はエルサレムに戻っていいよという命令で、彼らはすぐに戻って行きました。戻って行ったとて、エルサレム神殿の跡にはジュピター神殿が建ってるんです。ジュピターってゼウスのこと。ローマの守り神/守護神の中で最高神。ジュピター。それは本当に心痛むことだったけど、ユダヤ人たちは元の約束の地に戻ることが出来たんですね。

しかし、悪い命令が1つあったんです。コンスタンティヌス帝は、313年にキリスト教をローマ帝国に於いて公認しました。313年まで、キリスト教はローマ帝国内で禁教令によって禁じられていたのです。なので、クリスチャンたちは集まることはダメ。もしクリスチャンが教会堂を持っていたら、その建物は潰さなければなりません。もし持っている聖書があるなら焼き捨てなければなりません。リーダーたち・責任者たち・聖職者たちは皆 投獄され、その勅令に反抗する者は全財産没収の上、ローマの神々にいけにえを献げるように強制されました。

この命令は、313年のキリスト教公認のちょうど10年前に出されたんですね。ディオクレティアヌス帝（244-311/在位 284-305）によって出されたんですが、なぜ彼は、そんなにキリスト教/クリスチャンを目の敵にしたのでしょうか？

クリスチャンは唯一の神だけを礼拝するんです。それ以外の人間の手で作った神々を拝みません。ローマは多神教です。その神々のうちの1つはローマ皇帝自身だったんですね。ローマ皇帝は生き神様/現人神（あらひとがみ）であられたのです。しかしクリスチャンは、ローマ皇帝を政治家として、また皇帝として尊敬・尊重はするけど、神として拝むことは断じてしなかった。それは、ローマ皇帝の気に入らないことでした。

更に、当時クリスチャンは、ローマの人々から無神論者・神を恐れない人と言われていたんです。どういうことか？ 唯一の神のみを拝むということは、それ以外の神は神として認めないということで、一切拝まなかったんですね。だから、ローマの人々から見れば「クリスチャンは無神論者・神を信じていない者たちだ。」いや、神を信じてないんじゃないくて、本物の神のみを信じて、人間が手で作った神々を神として認めなかったのです。

聖書の神は人間を造った神です。人間が作った神じゃないんです。人が作った神は人を助けることは出来ません。人を造られた神のみを拝む。これが聖書が語っているところなんです。

ある方は「狭い考え方だなあ」というかも分かりませんが、もし愛する妻に「あなたにとって夫は私だけだから、私だけを夫として愛しなさい」と言ったら、妻は「モチロンそうよ」と言うんじゃないですか？世の中70億の人口のうち35億は男だから、どの男でも選り取り見取りどうぞ、なんて言ったら、それは愛していることにならないと思います。

神との人格的関係を考えた時、何でもオッケーというのは、ほんとの人格的な関係ではないんですね。あなたを造った神は、“あなたの神は創造主だけだ”ということを強調しておられるのです。クリスチャンたちは、その言葉を額面通り受け止めていたというわけなんですね。

ところが、ディオクレティアヌスがキリスト信仰を禁止すればするほど、迫害すればするほど、いよいよ増えていくんです。それで、片っ端から刑務所の中に放り込んで行くんですが、その結果どうなったと思いますか？

牢屋の中がクリスチャンだらけになるんです。つまり、牢屋の中が結果として教会になった。もちろん、そこには神を信じていない 一般的犯罪を犯した人たちも入っているけど、あんまりにもクリスチャンが多いので、牢屋の中で感化を受けてクリスチャンになっていくんですね。犯罪者がクリスチャンになって、そこから出所していく。これはね、禁じてても禁じてても、自分の力が全然利かないということなので、皇帝が震え上がったのです。

そこで、投獄という方法ではなく、人々が集まる円形劇場のような所に見世物として引き出し、ライオンの餌にしたんです。飢えたライオンに素手のクリスチャンたちを与えて、それを皆で見物する。ほんとに狂ってるとしか言いようがない。そういうことが横行したんですね。

しかし、コンスタンティヌスが 313 年にキリスト教公認した。迫害をやめたということですよ。なんで、そんなことをしたのか？ あろうことか、彼の産みの母ヘレナがクリスチャンになってしまったんですね。もしこの勅令を認め続けるなら、自分の産みの母親をライオンの餌にくれてやるということ。そんなことはとても出来ないということで、313 年、遂に コンスタンティヌスはキリスト教の迫害をやめました。公認宗教にしたんです。それは、長い間迫害されていたクリスチャンたちには朗報でした。しかし、ユダヤ人には悪いニュースになったのです。

というのは、ヘレナは今や皇后様になり、大手を振って胸を張ってキリスト信仰が出来るということで、念願であったキリストゆかりの地を自ら巡礼するようになります。巡礼だけではなく、新約聖書の福音書に出て来るイエスが巡り歩いた町々・村々のゆかりのある所に、片っ端から教会堂やらモニュメントや記念碑なんかを建てまくるんですね。これは、イエス・キリストを拒否しているユダヤ人にしてみれば、非常に不愉快なことだったに違いない。

正しいとえかよく分かりませんが、冷戦時代、東ヨーロッパの国々はソ連共産党、特にスターリン独裁のあの圧力の下で次々に社会主義革命が起こり、不本意ながら共産党の支配下に置かれました。反抗する者たちは逮捕・束縛され、拷問を受けたりしたのですが、その権力の黒幕であるスターリンの銅像が、自分たちが大事にしている首都やゆかりの地に片っ端から建つんです。毎日、そのスターリンの銅像を見て暮らさなければならぬ。不本意で共産党政権下にある人々は、どんなに苦々しい思いでその銅像を見たことでしょうか。実に不愉快極まりないことだったに違いありません。

イスラエルの全地に、自分たちが否定しているイエス・キリストゆかりの建物が次々建てられて行くのを見た時、ユダヤ人たちは恐らく はらわたが煮えくり返ったと思います。特にガリラヤ地方がそうだったんですね。ガリラヤはイエス・キリストが育った地域です。生まれたのはベツレヘムですが、育ったのはナザレ。ナザレはガリラヤ地方にありました。イエス・キリストの公生涯の前半はガリラヤ伝道と言って、イエスの活動の足跡がたくさんあるんですね。そういう所に教会堂が建つ。ユダヤ人たちは面白くない。

とうとう AD395 年、ユダヤ人たちはガリラヤ蜂起という戦争を、またしても、いいですか、またしても！ローマに反逆してやっちゃうんです。

1 回 AD70 年にユダヤ戦争で大敗北して、エルサレム炎上して、世界に散らされたじゃないですか。ローマに反抗したらどんなに酷い目に遭うか、経験してるんですよ。

そして 2 回目。AD135 年 バルコクバの乱に敗れて、世界中に散らされるだけでなく、二度とエルサレムに入城できない。地名もエレッツ・イスラエルがパレスチナに変えられてしまった。エルサレムという地名はアエリア・カピトリナという名前に変えられてしまった。酷い目に遭ったじゃないですか。

3回目やるんです。ガリラヤ蜂起。ガリラヤ蜂起がどんな戦争だったか、詳細は未だに分かりません。というのは、ローマがあまりにも徹底的にユダヤ人たちを大弾圧したため、記録も殆ど残ってないと言われるのです。この徹底的な大弾圧で、ユダヤ人勢力によるローマ反乱は二度と起こらなくなります。ガリラヤ蜂起は最後の反乱でした。

やがてこのパレスチナ地域は、ローマ人にとって軍事的にも政治的にも絶対に手放せない場所、それだけでなく宗教的にも手放せない土地になったんです。392年にキリスト教が国教化されたんですね。国の宗教とされてしまうんです。いよいよ、国の重要な宗教的な聖地になってしまった。なので、このパレスチナ地域にたくさんのローマ関連のキリスト教の建物が建っていて、何が何でもそれらを守護するためにローマ軍が増強されるんですね。

それを見た時、エレッツ・イスラエル/パレスチナの地域に住んでいるユダヤ人たちは、“どんなに抗っても、ローマからこの地域を奪還して、自分たちの国を造るというのはもう無理だ、不可能だ”と諦めざるを得なかった。だから、ローマ帝国の中のユダヤ人たちの、“逆らって蜂起して独立しよう”という動きは完全になくなったんです。

しかし、ローマ帝国の中のユダヤ人は諦めたんですが、この時、ローマ帝国の外に住んでいたユダヤ人たちは違ったんですね。外部の軍隊を使って自分たちもその軍隊の中に入り、ローマに攻め込んでそこを取り戻そうとする動きが出て来たんです。そして、これがまた、世界史を大きく変えて行くことになるんですね。これについては、次回の『ごうちゃんねる』で詳しくお知らせしたいなと思います。

今日もチャンネルを合わせてくださってありがとうございました。また、このお話にお付き合い頂いたら感謝です。それではまた、『ごうちゃんねる』でお目にかかりましょう。さよなら！！

* 使用した聖書は『聖書 新改訳 2017』です。